

徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」会議録

I 日 時 平成25年8月5日（月）16:55～17:30

II 場 所 西部総合県民局美馬庁舎2階 中会議室

III 出席者（敬称略）

【委員】10名中 6名出席

青木正繁（部会長）、福島明子（副部会長）、
蔭山洋子、近森由記子、岡田育大、竹内祐介

【オブザーバー】10名中 9名出席

板東純平、高木和久、榊原陽子、山下哲央、島知佐、
小原和浩、蔵本聖子、松本秀明、釋子由香梨

【県】

政策創造部副部長、長寿保険課長 ほか

IV 次 第

（～ 現 地 視 察 ～ ）

1 開 会

2 議 事

（1）人口減少時代における地域を支える仕組み

（2）その他

3 閉 会

《配付資料》

資料① 総合計画審議会若者クリエイト部会 現地視察

資料② 平成23年度過疎市町村における集落アンケート調査結果（概要）

V 意見交換

（事務局）

皆様、長時間お疲れさまでございました。雨が急に降ってきまして、時間の関係もあってゆっくり御覧いただけなかった部分があると思いますが、御容赦いただきたいと思います。

それでは、ただ今から意見交換会に移らせていただきます。

まず、七條政策創造部副部長から御挨拶を申し上げます。

（七條政策創造部副部長）

ただ今、御紹介をいただきました、政策創造部副部長の七條でございます。

本日は、第3回の若者クリエイト部会ということで、御多忙の中、御出席をい

ただきまして、本当にどうもありがとうございます。

また、半日あまりの強行日程の現地調査ということで、雷あり、雨ありということで大変だと思いますので、重ねてお礼を申し上げます。

また、若干時間もおしておりますけれども、今回4か所の現地の様々な取組を見ていただきました。そこで、多分皆さん、様々な感じたところがあったのではないかと思っております。

また、現地に行ったすぐでございまして、熱いうちに意見交換をできればと考えております。

冒頭、長寿保険課長の方から話がございましたように、徳島県では現場主義というかたちで、課題解決の「種」は現場にあるということで、現場での取組を重視してございます。

若者クリエイト部会もそういった趣旨で、今回初めて現場でのこういう視察というかたちでさせていただきました。

本日のテーマは、「人口減少時代における地域を支える仕組み」ということで、現場に行っていたいただいたわけでございますけれども、気付いた点、それから感じたことなどを、感想も含めても構いませんので、幅広く御意見をいただけたらと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

(事務局)

それでは、この後の議事進行につきましては、青木部会長様、よろしく願いいたします。

(青木部会長)

それでは皆さん、本当に今日は御苦勞様でした。早速ですが、実は時間が限られてございますので、議論に当たりまして、事前にメーリングリストで2ポイントの視点を皆様方に提示させていただいております。

1ポイント目が「高齢者が、地域に『支えられる』のではなく、『支える』存在であること」といった視点。

2点目が、「住み慣れた地域・自宅で生活を継続するための支援の充実」の視点。

この2点から、今日の4か所を見ていただいた次第でございます。

この2ポイントを中心に皆様方から御意見、すぐにはなかなか出づらいものもあると思いますので、今日視察を終えた感想でも構いません。全員から意見を御頂戴したいと思いますので、岡田さんからよろしく願いします。

(岡田委員)

まず一点目の「高齢者が、地域に『支えられる』のではなく、『支える』存在であること」といった視点から、今日感じたことを含めて話をさせていただきます。

一つ印象に残ったのは、「増川笑楽耕」で高齢者の方々がいきいきして、若者たちとか担い手になりそうな人たちに対して教えてることで元気になってきているかもしれない、

もしかしたら、忙しくて病院に行けなくなっているかもしれないみたいなことを言っていて、やっぱり高齢者の方々が教える気持ちというのはすごく大事だなということを感じました。

それで、それを県としてサポートしていくにはどうすればいいかということなんですけど、高齢者というのは、若者とか担い手になりそうな人たちを自分たちの地域に呼んでくるのはなかなかできないので、呼んできてあげるのが県としてサポートできることなのではないかと思う。呼んできてくれたら、私たちの場所でいろいろ教えられるものがたくさんあるというようなことが考えられると思いました。

もう一つが、「住み慣れた地域・自宅で生活を継続するための支援の充実」という視点でということで、今後拡大すべき事業ですが、「いろどり屋」は「社会福祉法人博愛会」がされているものなんですけど、もしかしたら、「クロネコヤマト」といった配達業の方々とか、見守り事業の中にも含まれるかもしれませんが、例えば、薬を配達する人がいるかどうかわからないが、いろんな物をもっていかれる方が、同じようにそういう商品を売ったりとかしていくというところを募集して、事業をしてやってみたらおもしろい、いろんなアイデアが出てくるのではないかと感じました。

(小原オブザーバー)

「人口減少時代における地域を支える仕組み」ということですが、高齢者というのはいろんな人がいるということで、今日見た「いろどり屋」を使っているお二人と、入所している人たちでは全然元気度が違うし、高齢者といっても一括りにできないなというのがあって、「地域を支える仕組み」というのでは、正直、高齢者を自分自身が支えているかということ、金額的では社会保障費、税金等で支えているとは思いますが、自分自身の血縁以外で支えているということをあまり感じないので、何か具体的に支えるようなこととか、元気な人たちは実際元気に働いて生産的な活動ができるのではないかと、また、それをサポートできていければいいと思いました。

岡田さんと同じ意見だが、「いろどり屋」の配達とかだと、民間の宅配さん、例えば「アマゾン」に電話したら無料で持ってきてくれるし、同じように郵便さんとか巡っている人たちがいると思うので、その辺が連携したら上手く回せるのではないかと印象でした。

(蔭山委員)

まず一点目ですが、今日「増川笑楽耕」を拝見するまで存在を私は知りませんでした。今回視察するに当たって初めてこういう施設があることを知りました。

今回の視察では、働く側、支える側が、それぞれどういう日程でどういう役割をしているかというところまでがわからなかったが、多分、今仰ったように高齢者といっても一括りにできなくて、世代も違うと思うし、得意分野とか昔就いていた職業も違うと思うが、担い手の側が奥様グループみたいにおっしゃっていて、だんだん減っているとおっしゃっていたが、何となく自分が奥様グループの一員になったと考えると、一回入ったらずっと当番が回ってきて抜けられないんじゃないかとか、自分が例えば苦手な分野、料理を教えるとか、自分はしたくないけどそういう順番が回ってくるのではないかとか、ちょっとそのメンバーに入るのに強制的に入らなければいけないムードだったりとか、一回入ったら

抜けられないとか、何かそういうのがもしかしたらあるんじゃないのかなとちょっと思いました。

それぞれ昔やってた仕事とかで得意分野があると思うが、それと実質的に働く内容というのがもっとマッチングするようなシステムがあったらいいのではないかなと思いました。

もう一点は、「小規模多機能ホーム 弥生」、すごく良い施設だと思って、25人しか受入がないということなので、てっきりキャンセル待ちで何年も入れない状況かと思ったが、あんなに素晴らしい施設で、一人を3人で見ていただけるというのに、ずっと定員に達していないというのと、何となくPRが口コミに頼っている感じがあったので、もうちょっと広くPRできる方法があるのではないかというふうに思いました。

(蔵本オブザーバー)

「こういうのがあればいいな」というふうな思いから話しをさせていただきたいと思いますが、高齢者の方は、例えば、若者の面倒を見るとか、若者から頼りにされていると自分で感じられたときに生きがいにつながっていくのではないかというふうに思いました。

例えば、山の中の田舎で何も無いというふうを感じる部分を、何も無いことが都会の人にとっては良いことなんだというふうに思えると思います。そういったことを何か活かさないかということで、例えば、大学の夏休みに大学生を一人住まいの高齢者が受け入れをして、一週間とか一か月、一緒に夕飯をつくるとか、田んぼを耕すとかいうことで「世代間同居」というふうなことをしてみてもどうかと思いました。

一週間とか一か月とか長い間生活をするので、価値観や趣味の違いとかが出てくる可能性があるんで、行政としては、その部分のマッチングを徹底的にあらかじめ調査をして、一人なり二人なり、そういうふうな「世代間同居」というものを行っていければ、今後おもしろくなるのではないかと思いました。

(榊原オブザーバー)

今日見学させていただいて、皆さんからも意見がたくさん出ていた中で私も同意見なのが「役割をもつ」というところで、これから団塊の世代が65歳を迎え、これから高齢化社会になっていくというところで、仕事をリタイアした後、第二の人生を歩む団塊の世代の方たちに、今まで仕事で培ってきたものを今後地域に向けて発信、協力していけるところ、団塊世代の力を活用した取組が何かできたら、すごく大きな力になるのではないかという気がしました。

そういうところで、「今こういうところで困っているのを力を貸してくれる方いませんか」というような、行政側の取組、イベントであったり、農作業等であったり、こういう施設でこういうところが困っているとか、何かきっかけをつくっていけば、団塊の世代の方もどんどん乗ってきてくれるのではないかという気がしました。

二点目の、「住み慣れた地域・自宅で生活を継続する」というところで、今日お宅を訪問させていただいたところでは、近所付き合いがわりとあるのかなというところで、近所の繋がりというのが、その地域で生活していく上で基盤なのかなと思いました。

今後、私たちが高齢化を迎えたときに近所との繋がりが果たしてあるのだろうかという

あたりで、何かあったら気付いてもらえるシステムというのがこれからどんどん必要になってくるのではないかなという気がしました。

(島オブザーバー)

本日の視察を踏まえて、印象に残っていることは、「増川笑楽耕」での東みよし町の職員の方の説明の中で、高齢者の方が教えることでいきいきとしているということをおっしゃっており、やはり、生きがいを持つことや社会貢献に参加することが健康寿命延伸にも繋がっていくと思います。

そして、高齢者が地域を支える存在といった視点から、先日の新聞記事で拝見しましたが、「三好市シルバー人材センター」の取組として、市内の一部地域でゴミ出しや買い物といった日常生活の簡単な作業を100円から500円のワンコインで引き受けるサービスを実施するという内容の記事を拝見し、そういった、高齢者の方が地域を支えるという取組が拡大していけばよいのかなと思います。

また、それを支援する上で、行政がバックアップする取組としては、需要と供給のマッチングやコーディネート、それから地域参加へのきっかけづくりや情報提供などが考えられると思います。

次に2点目「住み慣れた地域・自宅で生活を継続するための支援の充実」ですが、本日の視察の中の「いろどり屋」を利用されている方の実際の声を聞くことができ、「本当にいい事業ができて助かっている、これからも続けてほしい」といった内容のことをお聞きし、やはり買い物支援というのは重要だと感じました。

現在、徳島県でも新聞販売店等と高齢者等の見守り活動に関する協定など結んでおりますので、そういった、配達と見守りなんかのように、何かに加えて、一石二鳥の取組ができればよいのかと思います。

(釋子オブザーバー)

ところどころの参加だったので、具体的な意見がまとまってないですが、「増川笑楽耕」でいただいた意見を基に東みよし町の更なるPRに取り組めたらいいかなと思います。

生きがいづくりじゃないが目的をもってすることが大切なのではないかなというふうに思いました。

(高木オブザーバー)

「増川笑楽耕」では、出身者が興した企業で帰ってきて地域興しに貢献しているということで、人口は減っていつているんですけど出身者も人口と。その地域のことを考えて出て行ったんですけど、「出身者人口」ではないですけど、そういうのをキープして、インターネットとかできない方もいるかと思うんですけど、今だったらネット社会なので、そこらへんは竹内さんに聞きたいと思うんですけど、いろいろアプリがあるので、そういったもので出身者との繋がりをずっともって繋がっていったら、その人口は減っていくんですけども出身者というのはいますので、これで地域興しができるのではないかと思います。

もう一点、高齢者というのは、経験とか知識とか時間を現役世代よりは持っているとい

うことなので、そういった方と交流する場を設けて、私の父親なんかもこれまで子どもとあまり接しなかったのが、孫が生まれてからしつこいぐらいに世話をしてくれるようになったので、結構そういう要素がある人は多いのではないかと思います。そういった方が「多世代交流」といいますか、子どもと接するような機会を持てば、社会に貢献できるような仕組みになるのではないかなと思います。

その具体的なものが実は「シルバー人材センター」だったり「老人クラブ」ということだろうと思うんですけど、名前が多分、60歳や65歳の方だと「シルバー人材センター」、とか「老人クラブ」だとなかなかとつきにくいところがあるのかなと思いますので、そこらへん、そういう精神的なハードルを下げながら、そういう機会を増やしていくのが行政としての役目かなと思いました。

(竹内委員)

四つ見せていただいた中では、収益モデルについて触れていた事業者さんもいくつかいたと思うんですけど、個人的な考えとしては、ある程度スタートアップには行政なり、国・県なりの資金の投入というのが必要かなと思っているんですけど、ある程度までいくと、独立してやっていって軌道に乗らないとまずいのかなと。そうでないと、いつまでも資金を投入し続けるだけでは、国のお金を使って借金を増やしてしまうことになるので、なんとかしなきゃいけないのかなと漠然と思いました。

国とか行政としてやれることとしては、お金をあげるのではなくて、できるだけ情報をあげる。例えば、宅配業者さんが車で走っているときに、「道に石があったらどけるよ」というのは、あの方たちのノウハウとしてどんどんたまっていると思う。そういう同じ失敗を別の県がやっていると思うので、それをできるだけ共有してあげれば、しょうもない失敗を各事業者さんそれぞれが工夫してクリアしなくてもよくなるのではないかなと思いました。

もう一つ、別の観点なんですけど、人口減少のカーブがきついと耐えきれなくなってしまうので、人口減少するにしてもカーブを緩めてやるということがすごい大事だと思います。

そのためには、人を入れなければいけないとっていて、人が減っているということは、代わりに土地と家はどんどん空きが出てきているはずなんですね。

空き家にもいろんな事情がありまして、仏壇があるとか、知らない赤の他人には家は貸せないとかいろんな人間的な事情があって、貸せない空き家は結構いっぱいあるんですけど、そこに行政が間に入ってあげることによって障壁を取り除いてあげれば、家が結構貸し出せて、それによって都会からもしかしたら人が来てくれるかもしれないとか、あるのではないかなと思いました。

(近森委員)

今回4か所の視察をさせていただいて、テーマにもありましたように、自分たちの地域は自分たちで解決しようという気持ちがとても私には感じられました。

蔭山さんもおっしゃってたんですけど、どれも始まった新しい事業ばかりで利用率の向上というのが結構課題ということをおっしゃってたことが多かったのがちょっと印象に残りました。ニーズあっての事業を開始したのではないかなという部分もあるのではな

いかと疑問に思いました。

あとは、「いろどり屋」のお母さんの家に行かせてもらって、もてなしのあの感覚というのは行ってみないとわからないと思いました。「増川笑楽耕」を訪れる皆さんもああいう癒しを求めて行かれるんだらうなとすごく感じました。私も行っただけで、お母さんと話ただけでちょっと癒されたところがあったので。

今さらちょっと思ったんですけど、「増川笑楽耕」もPRのこととかいろいろ言われてきましたけど、他にも坂本ですとか、いい村落の農村体験できる場所はたくさんあると思うので、そういうところとネットワークをつくることができるのであれば、ネットワークをつくっていただいたら、またそれは一個一個違うと思いますので、そういうので広報できるのではないかと思いました。

(板東オブザーバー)

地域を支える高齢者ということについてなんですけれども、私が感じたのは元々多分あの世代の方というのはこれまで地域を支えてこられたんじゃないか、むしろ、それよりも下の世代がどこかでその地域から離れてしまったことがあったんじゃないかと。逆に言うと、そういう若い世代がどんどん高齢者に、高齢者が何歳からというのもないですけども、上の世代の方とのいろいろな交流が復活すれば、より地域として活性化していくのではないかと。むしろ若い世代がどう地域に入っていくかということをちょっと思いました。

特にそれを思ったのが、先ほどのお話にもありましたけれども、「いろどり屋」で利用されている方のお宅をお邪魔したわけですけども、大変歓迎していただいて、前から準備していただいて、お茶も入れていただいて、なかなか離れるのがもったいないぐらいのいろいろおもてなしをしていただいたわけで、多分若い世代との交流に、表現がどうかわかりませんが、飢えているところがおありなのかなと。そういうところに若い世代がもっと入っていくのをどう考えていくかというのが一つ課題なのではないか、むしろ私としてはそちらを思いました。

(松本オブザーバー)

「増川笑楽耕」のような事業をするときには人の力が重要になるなと思いました。おそらく増川の住民の力になっているのは、田舎の風景だったり、校舎だったりとか、町外どこに向けても誇れる資源というのが一番の力になっているのではないかと思いました。

行政の人間として、事業を行う際に、誇りだったりとか、そういう資源を見つけて、人の力を上手く導き出すというのが重要じゃないかと思いました。

高齢者福祉関係ですが、今後どのサービスについても必要になっていくし、どれか一つでもダメだし、どれもが必要になるのかなと思いました。

更に言えば、電球一つ替えるにしてもできない方もいらっしゃるだろうし、どこまで行政がするのかというのはちょっとわからないところもありますが、やればやるだけする事業はあるんだなと思いました。

(山下オブザーバー)

「支えられる」のではなく、「支える」存在であることといった視点からということ

すが、「増川笑楽耕」の例でいうと、教えるのが生きがいとなって、目に見えないところで効果が出ている可能性もあるというような話を聞きましたが、僕は土木の人間なので土木の例で言うと、例えば、職人さんが減ってきているんですが、例えば特に石工とか伝統的な部分というのが減ってきておまして、それを次の世代に伝えていくというような役割をその人に与えるというか、披露するような場所をどんどん与えてあげれば、その人が活躍する場ができて、それが生きがいになるのかなと思います。

「住み慣れた地域・自宅で生活を継続するための支援の充実」ということでは、「いろどり屋」を実際に利用している方の話を聞くと、ものすごく感謝していて、ちょっと行っただけでいろいろお菓子が出てきてという感じで、ものすごい良い雰囲気ができあがっていたと思うんですけど、ただ今日見に行ったところというのは、結構国道から近い部分で、私が勤めている那賀町でいうと、「いろどり屋」にそのまま当てはめようとする、採算とかの部分があって、「いろどり屋」は地元のスーパーなどから食材を買っていると聞いたんですけど、那賀町でいうとスーパーもないので、その地域、地域でもっと考えていかなければならないところもあると思うんですけど、そういったところをクリアできるように行政で支援していかなければいけないのかなと感じました。

(福島副部長)

二つの課題を全部合わせてと、あとは「地域の方が生きる」ということはどういうことなのかということの観点で考えてみました。

「生きる」というのは、衣食住という本当に最低限のことがもちろんできなくてはダメで、でも最低限のことだけやっておけばいいかといえはそうではなく、それに加えて、いきいきと生活することが多分重要になってきて、今回拝見した四つの取組は、どこも継続するには経済的にすごい厳しい状況にあるというのが現状であったかと思います。

その中で今後の課題としては、高齢者が支えて、高齢者が支えられてというような状況も生まれるかと思いますが、その中で、二番目の課題である「住み慣れた地域で生活していく」ための仕組みについて、それぞれの取組が一つのビジネスとして成り立っていく、竹内さんがおっしゃってましたが、一つのいいサイクルでちゃんとビジネスとして成り立っていないと、それはもう継続しないということかと思いますが、そういうふうなシステムを構築するのがまず重要かなと思います。

あとは、担い手になる人というのが、地域にいる人たち、本当に一人、一人ということになりますので、「どなたかが代表でこの事業をします」とかというようなのではなく、「皆さんが、それぞれ自分たちが取り組む担い手なんだよ」ということを認識していただけるような社会をどんどんつくっていく必要があるかなと思ってます。

先ほど近森さんが言ったように、「ニーズあっての取組ではないか」と、「でも何かあまり利用がないよ」というような話がありましたが、これについては、やっぱり「利用しづらい」、「こんなことしてほしかったんだけど」、「したいんだけど」と言っても、利用しづらいとか、自分たちが取り組みにくいというような問題があると思いますので、多分、行政の方々もすごくいろんな中に入って頑張ってくれてると思いますが、現状で「どんなところに問題があるのか」、「どういうことが課題なのか」というのをもう一度洗い出してもらって一つずつクリアしていけないと、ちゃんとしたサイクルで回っていないかと思

ます。

行政の方の役割としては、いろんな取組に関して始めるきっかけをつくる。あとはそれを繋いでいく。人と人ともそうだし、機会と機会も繋いでいかないとダメだし、それが継続して成り立っている事業については、それをサポートしていくと。

それぞれ住民が行政にかなり頼っているところがあって、行政に「こんなことしてよ」と求めることがたくさんあるかと思うんですが、「言われるからしないとダメだな」というのではなく、「地域の方それぞれが取り組んだところをサポートするのが行政ですよ」ということをちゃんと地域の住民の方にわかっていただけるように、我々からももちろん申し上げますけれども、行政の方も「言われたからやっているけど、でも本当はみんながやってほしいんだけどね」というところを思うだけではなくて、ちゃんとそういったことを皆さんが皆さんのためにやるのが、今後の良い社会をつくっていくためには必要ですよ」ということを社会としてつくっていかないと本当に行政頼みになって、行く行くはどんどん尻すぼみになっていく地域になってしまうかなというふうに思いますので、それぞれの行政の人も地域の人たちもその他の人たちも支え合えるような社会というものに挑戦することが必要かなと思います。

(青木部会長)

今日の視察で思ったポイントは、間違いなく「いきいきしている」というキーワードだと思います。高齢者の皆さんがいきいきとするためにはどうするかというのを、これから社会保障、また介護保険等について考えていくべきではなかろうかなと思っております。

今日皆さんから御意見をたくさんいただいて、ここで本当は御議論をしたいところですが、実はもう時間がございません。

今日いただいた意見等は、新たな政策創造の種、ヒントとして、今後の施策等に活かしていただきたいと事務局に取りまとめ申し上げたいと思います。

ただ、これで終わりではなくて、メーリングリスト等で、これだけの議論では到底收拾がついておりませんので、皆さんから今日御発言いただいた内容に加味していただいても結構ですし、またプラスアルファを付け加えていただいて、報告をあげていただきたいなと思っておりますので、そこに何なりと御意見、御提言を書いていただければなと思っております。よろしくお願ひいたします。

時間がないのもう一点だけ。今後の部会の運営についてなんですけれども、今回は県西部に行きましたので、やはり西に行ったら南に行きたくないですかね、皆さん。ということで、次回は10月下旬以降に県南部地域に現地視察をしてはいかがでしょうかという御提案なんですけど、皆さんいかがでしょうか。部会長がまた勝手に決めると言われてもいけませんので、よろしいでしょうか。南へ。半ば強引ですけども、今度は南へ行きましょう。それでは、そのようにさせていただきます。

また、部会とは別の話ですが、今日の資料の中に一点だけ、県庁の別のセクションから私のところにイベントへの出席要請が来ております。

11月30日の土曜日に徳島大学にて、徳島大学のチーム「繋ぎcreate」が実施主体となって開催する「とくしま『若者L・E・D』教室」で、大学生の皆さんと「徳島の未来」について、意見交換会を行うというものです。

クリエイト部会は、一步先に我々、社会に出て活躍しておりますので、やっぱり若者代表として、是非とも、“クリエイト部会のみなさまにも”とのことですので、積極的に御参加をいただきたいと思います。

この案件につきましても、次回の日程調整とともにメーリングリストで調整をさせていただきます。日時だけ11月30日午後4時から徳島大学の方でということで決まっておりますので、また調整をさせていただきますので、是非皆様御参加の方、よろしく願いいたします。それでは、皆さん、何か御意見ございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、最後に事務局から何かございますか。

(事務局)

本日の会議録につきましては、事務局で取りまとめた上、御発言いただきました皆様に御確認いただき、御発言者名も入れて、公開したいと考えております。それと今、部会長から報告の話がありましたけれども、これはまた事務局でまとめまして、関係部局と情報共有を図らせていただきたいと思います。その取りまとめについては部会長一任とさせていただきますので、御意見等、何でも結構ですのでよろしくお願いいたします。

(青木部会長)

それでは、今事務局から御説明がありましたとおり、会議録の件と報告の提出について一任を受けましたので、そのようにさせていただきますと思います。

それでは最後に、何かこれだけは言い残したということはございますでしょうか。よろしいですか。

それでは最後に私の方から、今日は本当に現地視察ということで、特に西部総合県民局の皆様方、御配慮どうもありがとうございました。

また本日は、七條政策創造部副部長をはじめ総合政策課、長寿保険課の皆様、御配慮ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして議事を終わらせていただきます。ちょっと走り走りですが議事運営に御協力ありがとうございました。以上でございます。事務局お願いします。

(事務局)

以上をもちまして、クリエイト部会を閉会させていただきます。ありがとうございました。

(以上)